

竹中平蔵 市場と権力

2013年4月に刊行された佐々木実『市場と権力―「改革」に憑かれた経済学者の肖像』が、今年9月に写真のように講談社から文庫化された。445ページの肉厚の文庫である。表紙カバー裏から―この国を超格差社会に変えてしまったのはこの男だった！経済学者、国会議員、企業経営者の顔を使い分け、「日本の構造改革」を20年にわたり押し進めてきた「剛腕」竹中平蔵。猛烈な野心と虚実相半ばする人生を、徹底した取材で描き切る、大宅壮一ノンフィクション賞・新潮ドキュメント賞ダブル受賞の評伝。

数年前にざっと読んだが、竹中平蔵という人物、学者・政治家・経営者に関心があり、文庫本をじっくり再読した。とりわけ印象に残ったところを紹介したい。

まずは、竹中平蔵の処女作『研究開発と設備投資の経済学』1984年の顛末である。この処女作のなかで、設備投資研究所の共同研究の成果を独り占めにしたトラブルだ。これについては著者の続編『資本主義と闘った男 宇沢弘文の経済学の世界』冒頭に出てくる。竹中の学位取得や教授昇任などを含め、「学者」としてのモラル、良心が問われる問題である。

90年代半ば近くまで、竹中は繰り返し「公共投資の拡大」を唱えていた。公共投資拡大論を主張するようになった契機は、日米構造協議だった。竹中の主張どおり、日本政府は90年代を通じて大規模な公共投資を続けた。その結果、何が起こったか。地方自治体の財政が危機に瀕したのである。私も日米構造協議に関心をもち、430兆円公共投資と地方自治体といったテーマで論文を書いた。本書を読みながら、当時の研究を振りかえることができた。

アメリカ政府の尻馬に乗るように「公共投資の拡大」を繰り返し訴えていた竹中は、自分がマクロ経済政策を担う経済閣僚になると、一転して極端なまでの財政緊縮論者へと変貌する。小泉政権が地方交付税交付金の削減などで地域経済を締めあげた結果、財政破綻の危機に直面する自治体が続出した。自治体を所管する総務大臣になった竹中は、企業には倒産があるのだから自治体も財政が行き詰れば破産させるべきだと言わんばかりに、「自治体破綻法制」整備に着手した。過去の言動に照らせば、無責任きわまる背信行為だろう。

竹中の無節操な変節とともに、かれが語る「構造改革」においては、経済学者の立場、企業経営者としての立場、両者の立場が混然一体として齟齬なく同居していることに驚かされる。竹中は現在も人材派遣業界の大手企業、パソナグループの取締役会長をつとめている。労働市場を営業の場とする企業グループの経営者でもあるのだ。不思議なことに竹中の話は、日本社会の変革を語りながら、パソナの市場開拓戦略にもなっている。

(2020年12月8日)

